

社会情報学の理念によせて

伊藤賢一(群馬大学)

itoken@si.gunma-u.ac.jp

1. 二つの社会情報学？

JSIS と JASI の統合 → 学会の理念が曖昧ではないか？

社会情報学は二種類あるのか？

2. 社会情報学の課題

- a). 社会情報とは何か
- b). 社会の情報化・高度情報社会をどのようにとらえるか
- c). 望ましい社会情報／情報社会とはどのようなものか
 - cf. 厚東・高坂「一般理論／歴史理論／評価理論」(1998)
- d). 望ましい社会情報／情報社会をいかにして作り出すのか

a, b, c は理論的探究、d は実践的探究？

→ 差し当たり思いつく反論： 実践なき理論は空虚であり、理論なき実践は盲目

2.1 情報化の光と影

群馬大社会情報学部の理念 → 「高度情報化社会の光と影」

→ 光の部分強調するのか、影の部分重視するのかの違いはあるが、いずれにせよ社会(法制度や政策、ビジネスモデル等々)のデザインや設計、人々の風潮・態度や考え方への批判などを志向しているはず

実践的な意図を欠いた探究は想定しがたい

3. ディシプリンとしての社会情報学

学問(discipline)の理解 → 曖昧ではいけないのか？

YES・NO 両方の立場がありうる

多様性を許容しつつも、ある程度の共通項がやはり必要ではないか？

→ 社会情報／情報社会、という理念とのかかわり

3.1 情報化の受容にともなう問題

情報化のインパクト → 受容されてしまったことで、そのこと自体のインパクトは薄れている

→ 「デジタルネイティブ」世代

とはいえ、いわゆる「情報化」にとどまらない社会情報学はありうるし、むしろ望ましい

3.2 長期的課題としての技術と社会

情報技術と社会の関係を問う学問

情報技術は社会の外部にあるものではない

むしろわれわれの存立は情報技術やコミュニケーションと切り離しては考えられないのではないか

情報技術(メディア) → 範囲を広く捉える

固有のディシプリンとしての社会情報学(伊藤, 2012; 遠藤, 2012; 正村, 2012 他)

4. 永遠の探究課題としての社会情報(学)

社会情報学の概念そのものがむしろ永遠の探究課題

喫緊の課題・時代の要請に答える必要

情報、メディア、情報社会といった基礎的概念はいつでも探究の対象である

文献

大黒岳彦, 2010, 『「情報社会」とは何か? 〈メディア〉論への前哨』, NTT 出版.

遠藤薫, 2012, 「社会情報学の射程」, 『社会情報学』第 1 巻 1 号, pp. 21-32.

厚東洋輔, 高坂健次, 1998, 「総論 社会学の理論と方法」, 『講座社会学 1 理論と方法』, 東京大学出版会.

伊藤守, 2012, 「巻頭言」, 『社会情報学』第 1 巻 1 号, pp. 1-2.

正村俊之(編著), 2012, 『コミュニケーション理論の再構築 — 身体・メディア・情報空間』, 勁草書房.

佐藤俊樹, 1996, 『ノイマンの夢・近代の欲望 — 情報化社会を解体する』, 講談社選書メチエ.

———, 2010, 『社会は情報化の夢を見る — [新世紀版]ノイマンの夢・近代の欲望』, 河出文庫.

田畑暁生, 2004, 『情報社会論の展開』, 北樹出版.

Webster, Frank, 1995, *Theories of the Information Society*, Routledge. = 2001, 田畑暁生訳, 『「情報社会」を読む』, 青土社.